2021/08/22　七里教会　　最上光宏

「人を裁くな」　　マタイによる福音書 7:1-6

新型コロナウィルスが蔓延し始めてから、すでに 1 年 8 か月ほどたちますが、日本では毎日のように感染者の数が増加し、医療崩壊を招き、収束のめどがたちません。

このウィルスによる感染被害が世界の各地で蔓延し始めたころ、日本のある政治家は、「日本の感染者数が他国と比較して多くなく、死者が少ないのは、民度が違うからだ」と言いって、諸外国からひんしゅくを買ったことがありました。つまり諸外国は、文化や生活のレベルが低く、日本は高いから比べ物にならない、というという意味のことを言ったのです。しかし、結果的に我が国も、何度も「緊急事態宣言」を出さなければならない状態になり、他国からのワクチン供与を待たなければならない状態です。

世界全体が、危機に直面して、何とかみんなで対策を講じなければならないというときに、「民度が違う」などと言って、他国を見下し自己満足する姿勢に、私は国民として、ほんとうに恥ずかしく悲しい思いがしました。

このようなことから、しみじみと思わされたことは、人というものは、いかに自分と他人、自国と他国を比較して、自分や自分の国のことを誇り、他人や他国のことを低く・悪く評価したがるものか、ということです。そういう偏った愛国心、自国主義というものが、国と国との関係を悪くし、争いや戦争にもつながるものであることを思い、国と国との関係、人と人との交わりの大切さを改めて考えさせられます。

先週、私たちは、同じイエスさまの「山上の説教」の中の 5 章 43 節以下から、「隣人を愛し、敵を憎め」と言い伝えられていた古い教えにたいして、イエスさまが「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」と、新しい神の国の教えを説かれたことを学びました。そこで私たちが学んだことは、人を「味方」と「敵」と分けて、一方を愛し、他方を憎むというような、分け隔てをせず、すべての人を自分の隣人として、愛しなさい。自分にとって「敵」と思えるような相手こそ愛し、彼のために祈りなさい、という教えを学んだわけです。

今日の聖書の 7 章 1 節以下の箇所は、それと内容的に少しダブりますが、イエスさまが「人を裁くな」と教えている箇所です。この「裁く」という言葉は、ギリシャ語の「クリノー」という言葉が使われていますが、この言葉は、もともと「分ける」とか「区別する」という意味の言葉です。つまり人を「良い人」と「悪い人」に区別するという意味です。そこから、「裁く」という意味で使われるようになったのです。

イエスさまの譬えの中に、終末における神さまの裁きについて述べている箇所があります。マタイ福音書の 25 章 31 節以下です。そこには、「人の子が栄光に輝いて再びこの地に来られるとき、すべての人を集めて、羊飼いが羊と山羊とを分けるように彼らをより分け、右にいる人たちには、神の国を受け継ぐように言われ、左側にいる者には、永遠の火に投げ込まれる」という裁きの言葉が語られています。そこでは「最も小さい者のひとりにしたのは、わたしにしてくれたことである」また「最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことだ」という有名言葉が、その裁きの基準として語られています。

その譬えにもありますように、「人を裁く」ことは、人を右・左に分けることなのです。しかもそれは、人が自分の基準で、勝手にすることではなく、神さまが、またイエスさまがご自身の基準で、なさることなのです。

今日の「人を裁くな。あなたがたも裁かれないためである」という言葉は、そういう背景をもって語られているのです。　「人を裁くな」。この言葉はとても難しいことです。私たちは毎日の生活の中で、無意識で人を裁いていることが多いからです。面と向かって人を裁かなくても、人と人とを分けて、「この人は好きだけれども、あの人は嫌いだとか」「この人とは口をきいてもこの人とは口を利きたくない」と思ったり、心の中で「あの人からこんなことを言われた」とか「こんな態度をとられた」と反感を抱いたり、批判することがあるのではないでしょうか。

スイスの精神科医でポール・トゥルニエという人が、「強い人と弱い人」と題する本を書いています。その本の中で、この著者は「人間には強い人と弱い人と、二通りの人がいるように見える。そして強い人がいつも弱い人を支配したり、裁いたり、力をふるっているように見えるけれども、実際に強い人と弱い人と二通りの人がいるわけではなく、人間はみな弱さをもっている。強い弱いは、単なる反応の違いであって、本当の強さは、人間の内的なところにあると言って、さまざまな例を挙げています。興味深く思ったのは、こんな事例です。[ある二人の患者が同時に手術を受けることになった。一人は見るからに強そうな男性で、もう一人は対照的にとても弱々しく見える婦人だった。手術室に入る前、この二人が出会うと、男性患者は女性患者を見て、馬鹿にしたように、”何を怯えているんだい。俺なんかへーちゃらさ”と強がってからかった。ところが全身麻酔をかけて意識が朦朧としてくるにつれて、女性の方は平然としているのに、その強そうに見えた男は、怖がって泣き出しそうになったというのです。つまりその男性の強さは、単なる強がりに過ぎなかった]というのです。つまり、人の外見と内面は違うというのです。強い人の中に弱さがあり、弱い人の中に強さがあって、人を外見だけで判断すべきではない、というのです。

この本の冒頭に、ジャン・ド・ルージュモンという人の詩が載っていて、私は時々この詩を読んで、人間の真実をついていると思っています。

「もし、私の隣人が、私より強いならば　私はその人を怖れる。
　もしその人が　私より弱ければ、　わたしはその人を軽蔑する。
　もし私とその人とが　同じであれば、　私は奸計に訴える。(陥れようとする)
　私がどのような動機をもっていたら、　その人に仕えることができ、
　私にどのような理由があったら、　その人を愛することができるだろうか。」

この詩人の問いは、私たち人間の共通した問いではないかと思います。人間はみんな平等で、強い人も弱い人もなく、上も下もないのに、互いに裁き合い批判し合い、共に歩もうとしないのです。

「人を裁くな」とイエスさまは言われます。なぜ人を裁くことはいけないことなのでしょうか。その理由として、ここで三つのことが言われているように思います。

(1)その第一は、人を裁くことは、自分を絶対化し、自分の判断や、正しさを絶対的なものとしてしまうからです。パウロは、ローマの信徒への手紙の中で、「正しい者はい

ない。一人もいない」(3:10)と述べています。私たちがどんなに正しく、絶対だと思っても、人の為すこと考えることは、「絶対」ではありません。神さまだけが正しく、その正しさだけが絶対なのです。人を裁くことは、自分自身が神の立場に立つことであり、傲慢のそしりを免れることはできません。

「人を裁くな」と言われたあと、主イエスは、「あなたがたも裁かれないようにするためである」と語られ、またこうも言われました。「あなたがたは自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる」と。私たちは皆、神さまの裁きの座の前に引き出され、自分の裁いた裁きの責任を問われるものだ、ということです。

(2) 人を裁いてはならない第二の理由は、人を裁くことによって、私たちは「自分」を見失ってしまうからです。私たちが人の過ちや欠点を裁く時、私たちは、あたかも自分が「正義の味方」にでもなったかのように錯覚し、相手を傷つけてしまうことがあるのです。その時、私たちは、ほんとうの自分自身を見失っているのです。

イエスさまは3節以下でこのように述べています。「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気付かないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか」。　前の訳では、「おが屑」が「ちり」と訳され、「丸太」が「梁(はり)」と訳されていました。いずれにしても、ここで最も小さい者と最も大きなものとの対比がなされているのです。私たちは、人の小さな欠点や短所には敏感に気付き、それを指摘し裁くのに、自分のことが見えないのです。人のことが気になればなるほど、自分に対して分かっていないのです。自分自身に大きな欠点や間違があっても、それに気づかずに、人を裁いていることが多いのです。そのようなものが、どうして他人を裁きその過ちを正すことが出来ようか？というのです。　これは、人の過ちや欠点を、見て見ぬふりふりをする、という意味ではありません。お互い誤りや欠点・短所などを指摘し合い、正し合うということは、必要なことです。陰でこそこそと言い合うということは、最も避けるべきことです。しかしその欠点を指摘し合い、正し合う時に必要なことは、自分自身の中にもある欠点や短所、罪を自覚しつつ、愛と配慮をもって忠告することがなのです。「人のふり見て、わがふり直せ」という諺がありますが、相手の非を通して、自分の非、自分の罪に気づきことが必要なのです。

(3)人を裁いてはならない第三の理由は、5 節でイエスさまが述べておられるように、「まず自分の目から丸太を取り除き、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことが出来る」ようになるためです。つまり、自分から先にまず、悔い改め主の赦しを得ることです。そのことを通して、私たちは、相手の非をも取り除くことができるのです。このようにして、私たちの目が共に開かれ、闇から解放され、共にキリストの光にあずかることが出来るのです。「裁き」ではなく、愛と赦しが、私たちを共に生きる生き方へと導くのです。

イエスさまは、この譬えで、私たちの目に「丸太」のような、自分ではどうしようもない「罪」があることを指摘されました。私はこの「丸太」からイエスがお掛りになった十字架を連想するのです。イエスさまの担われた十字架も荒削りの「丸太」でした。イエスさまは、その「丸太」を担いでゴルゴタまで歩かれ、その上でご自身の命を犠牲

にされたのです。その「丸太」は、私たちの目の中にある「丸太」のことではないか、私はふと、そんなことを思わされました。主イエスご自身が私たちの罪という「丸太」を担って、私たちの目を開いてくださったのです。共に主の贖いの恵みにあずかりつつ、共に愛と赦しの共同体を築いていきたいと願います。　　アーメン